

2023.06.27 シニアクラブ Online 会合報告

江戸時代、各地の大名が参勤交代で街道を往来し、人や物の行き来が活発になるとともに各地の情報も伝わるようになりました。

一方で、印刷技術も進み、それらの情報が文字や絵に描かれて多くの人々がそれを目にするようになって、旅ブームが起きます。

今回のサブタイトルは「元火消しが旅ブームを火付け」となっていますが、広重はもと下級武士の定火消同心でした。彼は浮世絵師を目指して歌川一門に弟子入りします。彼が描いた「東海道五十三次」は庶民の旅ブームに火をつけ、歌川広重の名を一気に高めることになり、版元は増刷を重ね何枚もの浮世絵を販売しました。

今回はその浮世絵を眺めることにしました。資料は次の通り。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E6%B5%B7%E9%81%93%E4%BA%94%E5%8D%81%E4%B8%89%E6%AC%A1\(%E6%B5%AE%E4%B8%96%E7%B5%B5\)_%E6%B5%AE%E4%B8%96%E7%B5%B5](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E6%B5%B7%E9%81%93%E4%BA%94%E5%8D%81%E4%B8%89%E6%AC%A1(%E6%B5%AE%E4%B8%96%E7%B5%B5)_%E6%B5%AE%E4%B8%96%E7%B5%B5) 東海道五十三次（浮世絵）

ここでは、江戸日本橋に始まり、東海道53の宿場および終点京の合計55枚の絵が保永堂版、行書版、隷書版の各3種、合計165枚載っています。各地の様子がよくわかり、居ながらにして旅を楽しんだ庶民も多かったようで、版元の保永堂（主人：竹之内孫八）はいくつかの絵の中に自分の名前を書き込んで自身のPRも行っており、一枚一枚描かれた絵の中からそれらを見つけていくのも浮世絵鑑賞として楽しいものとなります。



宿の客引き女が描かれた浮世絵が何枚かあります。どこの宿もそれだけ競争が激しかったのでしょう。

右は三十五次「御油」の様子です。外の喧騒に対して宿の中にはそれとなく書かれた「竹之内版」の文字が見えます。



続いて四十六次の「関」では本陣の様子が描かれています。この家紋はどこ的大名でしょうか。実はこれは広重の父の実家の家紋とのこと。さらに手前の男が持つ提灯には広重自身の印（しるし）が描かれています。

このように一枚一枚調べていくと時間がどれだけあっても足りません。

☆ 宮田さんから、各地の名物について話があり、十九次「鞠子」のとろろ汁は今でも地元の名物として商売をしていると、そして四十九次の「水口」では干瓢を干す女が描かれているが、この地の殿様が栃木に転封になり、現在栃木が干瓢の名産地となっていること等の紹介がありました。【次頁参照】

☆ 浅見さんから本日のテーマにちなんで「お江戸日本橋」他、「雨の歌」の紹介がありました。あいにく録音状況が良くなく記録に残すことができなかつたのが残念です。ネットに次の歌があったのでこれで代替します。ご了承ください。 <https://youtu.be/vYAdqPcHJil>

・ 浮世絵を見るのに変体文字解読も役に立ったようで、前回までの成果が少しは生きています。それではまたお会いしましょう。

2023.06.28 JVCKW シニアクラブ事務局長 田代 周





・江戸から京まで、かつては15日ほどかけて歩いていました。現在は新幹線を利用すれば2時間ほどで行けるところです。しかしこれでは途中の街々の様子は全く見るできません。そこで、今でも旧東海道を歩いて旅をする人はそれなりにいるようです。各地の様々な情報を得ることができるでしょう。

・浮世絵は木版画で刷られて、刷りを重ねるごとに細かなところがうつらなくなります。何回も使えば版を新しく作り替えます。



四十四次「庄野」では雨の中、番傘が描かれていますがそこには版元の名前「竹のうち」と書かれたものもあり書かれていないものもあります。後に、ここにも版元の広告を載せようとして文字を追加したのかもしれない。



・宮田さんから道中の名物紹介がありました。上の本の中に載っている一つ、鞠子（丸子）のとろろ汁は浮世絵の中でも立て看板に名物と書かれています。

旅のたのしみ

みやげ & 名物

とろろ汁



地元産の自然薯を使ったとろろ汁は歴史上の人物も舌鼓を打った自慢の味だ。

下は現在の店(丁子屋)

引用 GoogleEarth



・下右は四十九次「水口」です。干瓢が家々の塀や軒下、そして道端と一面に吊るされています。この様子が現在の栃木県でも見ることができるので

